

台湾・大甲の聖人 志賀哲太郎

志賀哲太郎顕彰会事務局 折田豊生

1 はじめに

2011（平成 23）年 12 月 30 日、台湾台中市大甲区公所は、熊本県出身の伝説的教育者、志賀哲太郎を大甲文昌祠で祀ることを決定。蔡信豊大甲区長は、「志賀先生がかつて大甲公学校で教師として 26 年間 1,000 人以上の台湾学生を教え、多大な貢献を残したため、彼を文昌祠に入れる」と発表した。

文昌祠は、文昌帝君など学問の神様が祀られているお宮で、台湾や中国では各地に造られ、その信仰のあり方は日本の天満宮に似ている。

かつて志賀が住んでいた文昌祠西隣の一室は「志賀哲太郎記念室」となり、志賀の生涯を描いた動画が上映され、肖像、本、啓発冊子などが展示されている。

このように、大甲区では、志賀が神として祀られ、歿後 100 年を経た今日においても、台湾の人々に「大甲の聖人」として敬愛されており、毎年 4 月の清明節（日本のお盆に相当）の時期には、公所（区役所）によって、鐵砧山（てっちんざん）南麓の志賀の墓域の清掃整備が行われるとともに、遺徳を偲ぶ祭礼が催行されている。

志賀は、活躍の場が台湾であり、渡台後一度も帰郷することがなかったため、日本では無名に近く、出身地熊本でも、その業績を知る人は殆どいなかった。

台湾の人々が、今日においても、志賀に対して深い敬愛の念を捧げている事実や台湾の人々への慈しみや子ども達に注いだ教育愛とその偉大な成果などを知るにつけ、また、台湾教育史や大甲街史に記された志賀の無私の子の精神の足跡を辿るにつけ、生前から「聖人」と呼ばれていたその崇高な生き方には、深い感銘を覚えざるを得ない。

2 利発な少年は政界の闘士となった

志賀哲太郎は、慶応元（1865）年、熊本藩沼山津手永田原村（現益城町田原）で鍛冶屋をしていた志賀甚三郎の長男として誕生（幼名岩太郎）。甚三郎は腕のよい職人で、河原村（現西原村）から沼山津手永会所役人・中村傳兵衛（郷土で中村家八代当主）に請われて田原村に移り住んだと言われている。手永とは現在の郡に相当する熊本藩特有の行政組織であり、中村傳兵衛は謂わば郡役所の No.2 の職にあった。当時、田原村の集落から北側に広がる農地に行くには、山林が障害となり、農民は、日々、長い迂回路を往来しなければならなかった。その悲願の改善策として、傳兵衛は、山林を切り開いて集落から農地へつながる道路を造ることを企画し、その土木工事のための堅固な工具を作れる優秀な鍛冶屋を探し求めていた。そうこうしているうちに、隣村の志賀甚三郎に白羽の矢が立ったという次第である。

傳兵衛は、甚三郎を屋敷の一角に住ませ、二人三脚の大工事がスタートする。やがて、甚三郎は嫁を迎え、3人の子どもが生まれた。その第一子が岩太郎である。

岩太郎少年は、家業を手伝いながら伸び伸びと育ち、やがてその俊英ぶりが傳兵衛の目に止まり、5歳になると、読み書きの手ほどきを受けることとなった。生来、好奇心が強く知識欲が旺盛であった岩太郎は、字が読めるようになると、傳兵衛所蔵の難解な書物にまで目を通すようになり、自ら読み耽ったという。

学力が伸びるにつれ、両親の理解もあって、木山の志賀塾（横井小楠門下の志賀喬木が主宰）や健軍の神水義塾に通って学識を深めた。神水義塾では、中西牛郎に英語を、中西惟寛に陽明学を、藤岡覚音に宗教学を、八淵蟠竜に仏典を学んだ。中でも、浄土真宗の僧侶八淵蟠竜は、貧乏暮らしに明け暮れながらも、困った人があれば借金をしてでも人助けをするような人徳者であり、志賀は屢々八淵と布教活動を共にしたという。少年期の多感な志賀に慈愛深い八淵が与えた感化は決して小さいものではなかったであろう。因みに、八淵は、後年、浄土真宗の重鎮となり、1893（明治26）年、米国シカゴ

で開催された万国宗教会議に日本代表 4 人のうちの 1 人として出席している。

明治 20 年、21 歳になった志賀は、上京して明治法律学校（現在の明治大学法学部）で法律学を学ぶまでになった。鍛冶屋の子は鍛冶屋を継ぐのが当たり前の時代にあって、極めて異例な進路が開かれたのは、先ずは中村傳兵衛あつてのことであり、傳兵衛なくして、後の「聖人志賀哲太郎」の出現はなかったと言っていいだろう。

24 歳のとき父甚三郎が死去し、志賀は学業半ばにして帰郷。九州日日新聞（現熊本日日新聞）の記者として活躍しながら、政治結社紫溟学会と国権党に加盟し、佐々友房、古荘嘉門、安達謙蔵ら（いずれも後に国会議員となり、大臣や県知事などになった）と華々しい政治活動を展開し、政界の 3 闘士の一人と言われるほどであった。志賀が全国を飛び回って活動していたことは、宗方小太郎（宇土市出身のジャーナリスト、日清戦争時の海軍嘱託諜報員、東方通信社社長）の日記に度々来訪の記録が残っていることから、伺い知ることができる。

3 理想の教師となり聖人となる

4 年ほど経って、志賀は、政界の醜悪さに嫌気がさし、教育界に転身する。その契機は明らかではないが、郷土史家増田隆策氏は、明治 32(1899)年に発布された教育勅語であり、その志を決定付けたのは、明治 26 年に文部大臣となった井上毅の言動ではないかと言う。教育勅語の起草者でもあった井上毅と志賀との交流を示す資料はないが、国権党における志賀の同志であった古荘嘉門と井上毅は、共に熊本の儒学者で藩校「時習館」の訓導を務めた木下韡村（いそん）門下の俊英であり、終生、刎頸の友であったから、中央政府における井上の言動は、逐次、古荘を通じて志賀にも伝わっていたであろう。

志賀は、明治 29 年 8 月、31 歳のとき、日清戦争後日本が領有したばかりの台湾に渡り、2 年ほどして大甲鎮（現台中市大甲区）にある公学校（台湾人の小学校）の雇教員

(代用教員) となった。

志賀は、渡台後、過去の栄光の一切を封印し、一人の人間として大甲街民と親密に交わり、大甲の風土を愛し、慈悲・儉約・謙讓を信条として謹厳な禅僧のような生活を送りながら、26年間、雇教員の身分に甘んじ、一貫して大甲に住み続け、台湾人子弟の教育教化に没頭した。

若い頃から儒教や仏教に親しんで育った志賀は、ともすれば植民地で優越的な言動をしがちであった邦人が多かった中で、台湾の人々と平等な立場で付き合い、少しも違和感を与えなかった。社会制度が不安定で植民地統治下の新たな生活に戸惑う大甲街の台湾人にとって、人格者で法律にも詳しい志賀は、官憲とのトラブルから身を守ってくれる心強い味方でもあった。

志賀が雇教員となった当時の台湾は、教育に対する理解がほとんどなかったため、志賀は、学齢期の子どもがいる家庭を訪ね、子どもを学校に出してくれるよう粘り強く親達を説得して回った。その心底には、自らの生い立ちが教えた教育の重要性に対する揺るぎない信念があったであろう。

志賀にとって幸運であったのは、大甲公学校初代校長を務めた金子政吉が、志賀と同等の価値観を有する人物であったことである。金子は志賀より5歳年下であったが、二人は肝胆相照らす仲となり、共に大甲街の教育の普及を図り、台湾人子弟の教育レベルの向上に尽力した。

やがて、そのような努力が実を結び、大甲公学校の就学率と進学率は、台湾全土で群を抜く高さとなって行った。志賀は、貧困家庭の子どもには学資を援助し、文房具を買い与え、病気の子がいると欠かさず見舞ったという。生涯独身で子どもがいなかった志賀は、教え子達を我が子のように愛し、育成した。

志賀の教育方針は、学力養成よりもむしろ道徳を中心とした人格形成に重きが置かれていたようだ。幼い子ども達は膝に乗せて抱え、後ろから手を取って読み書きを教えた

という。それは、志賀が幼い頃、中村傳兵衛に読み書きを教わったときの教育のスタイルそのものではなかったかと思われてならない。

教え子達は、上級学校や大学を卒業し、また、内地や外国への留学を終え、台湾各界の要職に就いても、終生、恩師の無類の愛情に感謝し、その人格と見識を尊重することを忘れなかった。大人になった教え子達との宴席は、いつも議論を交えたどんちゃん騒ぎになったそうであるが、その語らいの主題は、多分に、台湾の将来を見据えた新国家建設の夢であったに違いないのである。

志賀は、誰に対しても深く腰を折って礼をし、「礼儀の人」と言われていた。あるとき小さい子ども達が、四方から一斉に挨拶をしたら先生はどうするだろうと語り合い、試したことがあった。子ども達の悪戯に対し、志賀はいつものとおり一人一人に丁寧にお辞儀を返し、面白がって笑う子ども達と一緒に笑っていたという。

教え子達のみならず、大甲街の人々にとっても、礼儀正しく、献身的で慈悲深い志賀の生き方は、親しみ深いながらも自ずから畏敬するところとなり、志賀はいつしか「大甲の聖人」と呼ばれるようになった。

志賀が「ただの聖人」でなく、面白いところは、「斗酒を辞さず」と言われたほどの大の酒好きであった点である。誘われれば断ることなく付き合い、酔って醜態を曝すことなどなかったという。教え子達だけでなく、街の人々とも分け隔てなく交流し、こよなく酒を愛し、心を通わし合った志賀は、まことに愛すべき「聖人」であったであろう。

4 悩みと自決

台湾総督府は、明治 29 年、台湾の 14 の主要都市に国語伝習所を設置。明治 31 年 8 月、国語伝習所に代わって公学校が開設され、台湾人子弟の教育が本格化して行く。台北には国語学校（中等教育の国語部と教員養成の師範部の二部構成）が設けられ、明治 32 年に台湾医学校が設けられたほか、各地に中学校、高等学校、職業学校が次々に開校

し、昭和3年には台北帝国大学も設立され、内地の上級学校への進学や外国留学の道も開かれていった。児童の就学率は、当初1%にも満たない状況だったが、昭和19年には93%となり、日本統治時代の50年の間に台湾の教育水準は世界のトップレベルにまで到達したのであった。

大正時代になり、台湾では、教育レベルが向上するにつれて民族意識が高揚し、独立運動が激化していく。それは正に、台湾総督府民生長官を務めた後藤新平が「教育は両刃の剣」と危惧したそのままであった。

そのような風潮の中で、志賀は、次第に教え子達と総督府との間で板挟みになって行く。加えて、15年間苦楽を共にしてきた初代校長金子政吉がある事件を機に辞職することとなったのも、志賀にとっては不幸なことであった。

大正13年、台湾人と親密な関係にある志賀のことを快く思っていなかった2代目校長は、志賀を農園の管理人に降格させ、志賀の生きがいであった教育の仕事を取り上げる仕打ちをした。教育は畏怖であってはならないとの考えから官服の着用を忌避して和服で通し、昇進と異動を回避して大甲に留まり続けてきた志賀は、校長から見れば、扱いにくい存在だったのであろう。

志賀は、悩み抜いた挙句、入水して自決する。その背景には、日本語が共通語化して行く中で漢語が軽視され、終には公学校における漢語教育が全廃となった経緯があった。志賀は、そのような教育政策は、台湾文化の衰退につながると強く反対していたことから、志賀の自決は、多分に、総督府の方針に対する無言の抗議を示す重大な意味合いがあったと思われる。

志賀の突然の死を嘆く教え子や大甲街民の驚きと嘆きは大変なものであった。子どものいない志賀の葬儀は、教え子たちの手によって執り行われ、あるはずのない遺族席は年長の教え子達で埋められたという。1,000人の嗚咽に満ちた葬儀が終わり、長老格の教え子で台湾文化協会のリーダーとなっていた呉淮水を先頭として鐵砧山へ向かった

葬列は、神をまつる香路祭の形式が採られ、延々1kmに及んだ。庶民としては空前絶後の葬儀が行われたのであり、当時3千人ほどだった大甲街の人々は、街を挙げて聖人との別れを惜しんだのであった。

5 おわりに

志賀の死後42年経った1966（昭和41）年、世界中から参集した教え子達100余名により、生誕100年記念墓前祭が行われ、「志賀先生の碑」が志賀の墓の隣に建立された。日本人の顕彰など考えられない国民党戒厳令下の出来事であった。しかも、教え子たちが顕彰碑の揮毫を依頼したのは、政府の要人・孫科（中華民国建国の父・孫文の子）であった。

大甲区の志賀の墓と顕彰碑の周囲には、教え子達の墓が幾つも点在する。教え子達の志賀への思慕の情はあくまでも厚く、「死んだら先生の傍に葬るように」と言い遺して死んだ教え子達の墓である。

台中市大甲区では、志賀の墓域を守り続けて年毎に墓前祭を行い、志賀を文昌祠に祀ったばかりでなく、今でも、啓発冊子を幾つも作り、「大甲の聖人」の遺徳を若い世代に語り継いでいる。志賀が100年余の昔、教え子達と大甲街の人々の心の中に蒔いた種は、その後、絶えることなく、幾度も芽吹きを繰り返して今に至っているのである。

志賀が育った明治は、日本人が西欧世界を強く意識し、また同時に、日本人としてのアイデンティティを強烈に意識した高揚の時代でもあった。志賀の渡台の動機は明らかではないが、志賀が渡台した1896（明治29）年の初めに、台湾近代教育の礎となった、「六氏先生」と呼ばれる6人の教師（最年少17歳の平井数馬は熊本県出身）が反日ゲリラの犠牲となった、所謂「芝山巖事件」が起きていた。台湾の近代教育の進展は、「死して余栄あり」と言い遺して殉職した彼らの、明治人特有の覚悟を抜きにしては辿れない。

志賀の足跡を追えば、そこにもまた、一人の明治人として誠実に生きようとした姿が如実に現れるのであるが、自決に際し遺書に認(したた)めたと言われる「上御一人(天皇)に対して相済まず」との短い一言は、一連の経緯における志賀の心情を想わせて余りあるものがある。大甲公学校において志賀と志を共にした金子政吉元校長は、志賀の歿後、「一介の教師が国家を背負うような責任感を自覚していたことが志賀先生の本質である」という旨の弔辞を述べている。

遠い台湾の一隅にあって理想的な生き方を貫いた一人の日本人が今なお密かな光芒を放っていることに、深甚なる敬意を捧げたい。